

## 『悶絶スパイラル』

三浦 しをん／著 太田出版（2007年）

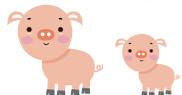
著者、三浦しをんさんの日常をつづったエッセイ集です。友達や家族、そして身の回りで起きる出来事がとにかくおもしろ、おかしいのです。直木賞作家でもある著者ですが、おかたいイメージはまったくなし。どうして、こんなにおかしなことがと感心してしまいます。また、著者のなんでもベスト5、例えばダイエットを決意した瞬間なども所収されており、その答えも爆笑です。



## 『豚キムチにジンクスはあるのか』

絲山 秋子／著  
マガジンハウス（2007年）

自炊をテーマに書いているエッセイです。そのため、出てくる料理がすべておいしいとは限りません。しかし、著者が成功だと思えたものに関してはレシピがついていたりもします。著者があまのじゃくだそうで、「冬に冷やし中華」にチャレンジしています。実施する前に結果はわかりそうなものですが、著者は真剣です。いつも奇抜な料理ばかりではなく「丼五連発」はどれもおいしそうです。



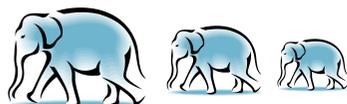
## 『これからはあるくのだ』

角田 光代／著 理論社（2000年）

『八日目の蟬』『紙の月』『空中庭園』などの映画やテレビドラマにもなった小説を書いた角田光代さんのエッセイです。

小説のイメージと違い、天然キャラな著者の素顔が垣間見られるエピソードがいっぱい。

道のあるいていて着物詐欺にひっかかったり、歯医者通いが恐怖だったり、方向感覚がなかったり、おもしろくてチャーミングで、きっとどこか親近感を覚えて、楽しく読み進めてもらえると思います。



## 『ひとりの時間』

華恵／著 筑摩書房（2007年）

今年、大学を卒業した著者が、15歳の時に出版したエッセイです。10歳からファッションモデルとして活躍し、12歳でエッセイ『小学生日記』を刊行、同時に映画出演もし、女優デビューしました。4～14歳の読書記録『本を読むわたし』でも、瑞々しい感性と表現力が評判になりました。この『ひとりの時間』は3作目ですが、物事を繊細に受け止め、丁寧な日本語で紡ぐ文章は、読んでいてほっこりします。



## 『未来への地図』

新しい一歩を踏み出すあなたに』

星野 道夫／著  
ロバート・A・ミンツァー／訳  
朝日出版社（2005年）

この本は、雄大な自然や野生動物を撮りつづけた、写真家星野道夫さんの講演に英訳がつけられています。経済学部の大学生だった星野さんがどうしてアラスカに行くことになったのか、アラスカでの生活の様子などが語られています。本文に挟み込まれ、掲載されている写真も、動物の可愛さや、自然の美しさの魅力たっぷり。そして、何より、好きなことをして生きるという人生の選択をしてもいいと、そっと背を押されます。

## エッセイとは？



①随筆。自由な形式で書かれた、思索性を持つ散文。【広辞苑 第六版より】

つまり、著者の見聞きしたことや、経験・感想などを気の向くままに書いている文章のことをエッセイといいます。

共感できる部分もあれば、自分では考えられなかった視点もあるなど、新たな発見があります。

友達との何気ない会話のように、気楽にエッセイを楽しんでください。